

力が、イエスの、あらゆる既存のものをのりこえて、裸の個人としての愛を説いたことばであったこともまた、明らかであろう」(『個の誕生』二八二、二八三頁)という。その「愛のことば」の射程はどこまで及ぶのか。それは問われ続けねばならないだろう。ともあれ、正負の視座のみでは括り得ないヨーロッパ・キリスト教、なかんずく宗教史というものの一段面をここに垣間見せられる思いがした。

### トマス・ベリー神父にみる自然と身体

—— 大いなる業のために ——

木村 武史

地球環境問題に代表されるサステイナビリティ問題に諸宗教がいかに対応しているかという比較宗教学的視点から現代アメリカ社会の代表的エコ神学者の一人であるトマス・ベリーの著作を取り上げる。地球環境問題を引き起こしている現代文明からサステイナブルな次世代エコ文明への移行を進める歴史的役割を「大いなる業」と呼ぶベリーの立場は、ティヤール・ド・シャルダンに倣って宗教と自然科学を融合する試みでもあり、世代間倫理問題への一つの解答でもある。

ベリーの地球環境問題に関する一つの立場は次のように言える。歴史的現在には生物多様性が爆発的に増加した新世代の終わりに差し掛かっている。生命に充ち満ちた新世代を終わりに至

らせようとしているのは近代の文明であり、人為的に引き起こされている。この点がそれ以前の地球上における生物(例えば恐竜)の絶滅と異なる。以前はある種の生命種が絶滅するという認識は持たなかったが、科学的知見を持つ現代の我々は、生物多様性が減少している、ある生物種が絶滅しているという知識を持っている以上、意識的に意志を持って次世代エコ文明の創出に取り組まなくてはならない、それが現代世代に課せられた大いなる業である、といえる。

ベリーは少数先住民族社会や近代以前のヨーロッパ社会で世界創成神話が機能していた、つまり functional mythology であったことを念頭に、自然科学が発展し、資本主義経済が跋扈する現代では、聖書の創世記に見られる神による世界創造の神話はもはや functional mythology ではないとする。では、何が代わりになるのであろうか。科学的知見に基づいた宇宙論と地球の歴史の物語が現代社会における functional mythology となり得る。ブライアン・スウェインとの共著『The Universe Story』はビッグ・バンに始まる宇宙の歴史から銀河の形成を経て地球の生成と生命の誕生と進化の一連の流れを「物語」として構成しようとした試みであり、The Great Work のための神話創出であるといえる。いわゆる地球の「自然」とは、このような宇宙論的な歴史を背景にもったものである。そして、重要な点は、この生態系である自然の生命体の一部である人間が知能を持ち、宇宙の歴史を知ることができるようになったという進化の到達点は、宇宙が自らを人間を通して自己認識的に知るようになったことをも示している。

自然科学的な知見の意義を認めつつ、自然科学だけではスピリチュアリティが欠けている。そして、ベリーは先住民の自然と密接に関わったスピリチュアリティを評価する。しかし、ベリーの立場は先住民の宗教とは異なり、イアン・バーバーが述べているように、自然科学的宇宙論を物語として受け入れつつ、キリスト教のスピリチュアリティを融合させる道である。それゆえ、興味深いことに先の『The Universe Story』には、宇宙の歴史に続いて、人類の歴史が旧石器時代から現代まで連続と綴られ、古代文明の意義やアジアの諸宗教の意義も強調されるが、歴史的出来事としてのキリストは姿を消す。

ベリーはアメリカン・ドリームが約束した「素晴らしい国」は、ベリー自身の野原の原初の経験の場所であるようなアメリカの自然環境を「浪費された廃棄物に満ちた国」に変えた、と厳しく批判する。高速道路、工場、灰色の煙、廃棄物の山、これらは「臭い(くさい)」と、否定的に評価する。この「臭い」という感覚的・身体的評価は極めて重要であると思われる。精神と身体を分離し、精神・理性を重視する立場からすれば、感覚的あるいは感性的とも見なされる「臭い」という文明への批評は意味をなさないかもしれないが、人間と自然との繋がりへの回復を目指す次世代エコ文明においては感覚的・身体的評価、判断は極めて重要な指針を示している。

## 正義と配慮——近代カトリック世界における

### 「倫理」的活動の展開——

寺戸 淳子

本発表では、近代フランス・カトリック教会世界における倫理的活動の展開例としてルルドの巡礼世界をとりあげ、そこにみられる変化の意義を説明した後、近代カトリック世界という、より広い文脈における倫理的活動の展開との関係を考察するため、この事例の特徴を比較の軸として、教皇庁の社会教説の現時点での総括として二〇〇四年に「教皇庁正義と平和評議会」が出した『教会の社会教説綱要』の内容を検討する。

地縁的・職能的結合関係が解体された革命後のフランスでは、貧困層の出現という形で社会問題が発生した。人権に基づく公的扶助や連帯主義による解決を目指す共和派に対し、フランス・カトリック世界では、労働組合運動を中心とする男性による「社会的カトリシズム」と、女性が行う「伝統的慈善」による対処が試みられた。そのような動きを背景に一八七〇年代に始まったルルド巡礼では、上流階級の男女が主導する、貧しい病気の労働者を巡礼に伴うことで社会的結合関係の回復(貧困層の社会統合)とそれに基づく社会正義の実現をめざした「傷病者巡礼」が生まれ、傷病者巡礼を支援する奉仕者団体が組織された。この傷病者巡礼を実践する過程で、上流階級の男女が巡礼の現場に持ち込んだ社会的カトリシズムの討議的性格